

るしへる

芥川龍之介

青空文庫

テンシユハジメセカイヲツクリ
 天主初成世界
 ツイデサンジユウロクシンヲツクル
 随造三十六神
 ダイイチノキヨシンヲ
 第一鉅神
 云略齊
 トノウ
 布兜(中略)
 ミズカラオモエラクソノチテンシユトヒトシト
 自謂其智与天主等
 テンシユイカツテオトシテジゴクニイル
 天主怒而貶入地獄
 (中略)
 るしジゴクニイツテクラウクトイエドモ
 輒齊雖入地獄受苦
 シカモイツパンノコンシンハマキトナツテセケンニユギ
 而一半魂神作魔鬼遊行世
 ヨウシ
 間
 ヒトノゼンネンヲシリゾク
 退人善念

サヘキダイサンヘキレツセイノウチガイジュリヤクキヨダイジュニコタウルノゴ
 左關第三關裂性中艾儒略答許大受語—

一

破提字はてうすと云う天主教を弁難した書物のある事は、知っている人も少くあるまい。これは、元和六年、加賀の禅僧巴はびあん 弁はんなるものの著した書物である。巴 弁は当初南蛮寺に住した天主教徒であったが、その後何かの事情から、でうすによらい DS 如来を捨てて仏門きえに帰依する事になった。書中に云っている所から推すと、彼は老儒の学にも造詣ぞうげいのある、一かどの才子さいしだったらしい。

破提字子の流布本は、華頂山文庫の蔵本を、明治戊辰の頃、杞憂道人鵜飼徹定の序文と共に、出版したものである。が、そのほかにも異本がない訳ではない。現に予が所蔵の古写本の如きは、流布本と内容を異にする個所が多少ある。

中でも同書の第三段は、悪魔の起源を論じた一章であるが、流布本のそれに比して、予の蔵本では内容が遙に多い。巴 弁自身の目撃した悪魔の記事が、あの辛辣な弁難攻撃の間に態々引証されてあるからである。この記事が流布本に載せられていない理由は、恐らくその余りに荒唐無稽に類する所から、こう云う破邪頭正を標榜する書物の性質上、故意の脱漏を利としたからでもあろうか。

予は以下にこの異本第三段を紹介して、聊巴 弁の前に姿を現した、日本の Diabolus を一瞥しようと思う。なお巴 弁に関して、詳細を知りたい人は、新村博士の巴 弁に関する論文を一読するが好い。

二

提字子のいわく、DS《どうす》は「すひりつあるすすたんしや」とて、無色無形の実

体にて、間に髪を入れず、天地いつくにも充満して在ませども、別して威光を顕し善人に
 樂を与え玉わんために「はらいそ」とて極樂世界を諸天の上に作り玉う。その始人間より
 も前に、安助（天使）とて無量無数の天人を造り、いまだ尊体を顕し玉わず。上一
 人の位を望むべからずとの天戒を定め玉い、この天戒を守らばその功德に依つて、DSの
 尊体を拝し、不退の樂を極むべし。もしまた破戒せば「いんへるの」とて、衆苦充満の地
 獄に墮し、毒寒毒熱の苦難を与ふべしとの義なりしに、造られ奉つて未だ一刻をも経ざる
 に、即ち無量の安助の中に「るしへる」と云える安助、己が善に誇つて我は是DSなり、
 我を拝せよと勧めしに、かの無量の安助の中、三分の一は「るしへる」に同意し、多分は
 与せず、ここにおいてDS「るしへる」を初とし、彼に与せし三分の一の安助をば下界へ
 追い下し、「いんへるの」に墮せしめ給う。即安助高慢の科に依つて、「じゃぼ」とて天
 狗と成りたるものなり。

破していわく、汝提字子、この段を説く事、ひとえに自縄自縛なり、まずDS《どう
 す》はいつくにも充ち満ちて在ますと云うは、真如法性本分の天地に充塞し、六合
 に遍満したる理を、聞きはつり云うかと覺えたり。似たる事は似たれども、是なる事は
 未だ是ならずとは、如此の事をや云う可き。さて汝云わずや。DSは「さひえんちい

しも」とて、三世了達の智なりとは。然らば彼安助を造らば、即時に科に落つ可きと云う事を知らずんばあるべからず。知らずんば、三世了達の智と云えば虚談なり。また知りながら造りたらば、慳貪の第一なり。万事に叶うDSならば、安助の科に墮せざるようには、何とて造らざるぞ。科に落つるをままに任せ置たるは、頗る天魔を造りたるものなり。無用の天狗を造り、邪魔を為さずするは、何と云う事ぞ。されど「じゃぼ」と云う天狗、もとよりこの世になしと云うべからず。ただ、DS安助を造り、安助悪魔と成りし理、聞えずと弁ずるのみ。

よしまた、「じゃぼ」の成り立は、さる事なりとするも、汝がこれを以て極悪兇猛の鬼物となす条、甚以て不審なり。その故は、われ、昔、南蛮寺に住せし時、悪魔「るしへる」を目のあたりに見し事ありしが、彼自らその然らざる理を述べ、人間の「じゃぼ」を知らざる事、夥しきを歎きしを如何。云うこと勿れ、巴弁、天魔の愚弄する所となり、妄に胡乱の言をなすと。天主と云う名に嚇されて、正法の明なるを悟らざる汝提字子こそ、愚痴のただ中よ。わが眼より見れば、尊げに「さんた・まりあ」などと念じ玉う、伴天連の数は多けれど、悪魔「るしへる」ほどの議論者は、一人もあるまじく存ずるなり。今、事の序なれば、わが「じゃぼ」に会いし次第、南蛮の語にては「あぼくりは」と

も云うべきを、あらあら下に記し置かん。

年月のほどは、さる可き用もなければ云わず。とある年の秋の夕暮、われ独り南蛮寺の境内なる花木の茂みを歩みつつ、同じく切支丹宗門の門徒にして、さるやんごとなきあたりの夫人が、涙ながらの懺悔を思いめぐらし居たる事あり。先つごろ、その夫人のわれに申されけるは、「このほど、怪しき事あり。日夜何ものとも知れず、わが耳に囁きて、如何ぞさばかりむくつけき夫のみ守れる。世には情ある男も少からぬものと云う。しかもその声を聞く毎に、神魂たちまち恍惚として、恋慕の情自ら止め難し。さればとてまた、誰と契らんと願うにもあらず、ただ、わが身の年若く、美しき事のみなげかれ、徒らなる思に身を焦すなり」と。われ、その時、宗門の戒法を説き、かつ嚴に警めけるは、「その声こそ、一、定悪魔の所為とは覺えたれ。総じてこの「じゃぼ」には、七つの恐しき罪に人間を誘う力あり、一に驕慢、二に憤怒、三に嫉妬、四に貪望、五に色欲、六に饕餮、七に懈怠、一つとして墮獄の悪趣たらざるものなし。さればDS《でうす》が大慈大悲の泉源たるとうらうえにて、「じゃぼ」は一切諸悪の根本なれば、いやしくも天主の御教を奉ずるものは、かりそめにもその爪牙に近づくべからず。ただ、専念に祈祷を唱え、DSの御徳にすがり奉つて、万一「いんへるの」の業火に焼かるる事を免

るべし」と。われ、さらにまた南蛮の画えにて見たる、悪魔の凄じき形ぎようそう 相など、こまごまと談りければ、夫人も今更に「じやぼ」の恐しさを思い知られ、「さてはその蝙蝠かわほりの翼、山羊の蹄、蛇の鱗くちなわろこを備えしものが、目にこそ見えね、わが耳のほとりに蹲うずくまりて、淫みだらなる恋を囁ささくにや」と、身ぶるいして申されたり。われ、その一部始終を心うちの中に繰返しつつ、異国より移し植えたる、名も知らぬ草木くさきの薫かぐわしき花を分けて、ほの暗き小路を歩み居しが、ふと眼まなこを挙げて、行手を見れば、われを去る事十歩ならざるに、伴ばてれん天連めきたる人影ひとかげあり。その人、わが眼を挙ぐるより早く、風の如く来りて、問いけるは、「汝、われを知るや」と。われ、眼まなこを定めてその人を見れば、面おもてはさながら崑崙奴こんろんぬの如く黒けれど、眉目みめさまで卑しからず、身には法服あびしの裾長きを着て、首のめぐりには黄金こがねの飾りを垂れたり。われ、遂にその面を見知らざりしかば、否と答えけるに、その人、忽ち嘲笑あざわらうが如き声にて、「われは悪魔「るしへる」なり」と云う。われ、大に驚おおいきて云いけるは、「如何ぞ、「るしへる」なる事あらん。見れば、容体ようたいも人に異らず。蝙蝠かわほりの翼、山羊の蹄ひずめくちなわろこ、蛇の鱗は如何にしたる」と。その人答うらく、「悪魔はもとより、人間と異なるものにあらず。われを描えがいて、醜悪絶類しうあくぜつるいならしむるものは画工のさかしらなり。わがともがらは、皆われの如く、翼なく、鱗なく、蹄なく、蹄なし。況いわんや何ぞかの古怪なる面貌あらん。」われ、

さらに云いけるは、「悪魔にしてたとい、人間と異なるものにあらずとするも、そはただ、皮相のけん見に止るのみ。汝が心には、恐しき七つの罪、蝸さそりの如くにわだかま蟠らん、」と。「るしへる」再び、嘲笑う如き声にて云うよう、「七つの罪は人間の心にも、蝸の如くに蟠れり。そは汝自ら知る所か」と。われ罵ののしるらく、「悪魔よ、退のけ、わが心はDS《でうす》が諸善万徳を映すの鏡なり。汝の影を止むべき所にあらず、」と。悪魔呵々大笑していわく、「愚おろかなり、巴はびあん奔。汝がわれを唾罵だばする心は、これ即驕すなわきようまん慢にして、七つの罪の第一よ。悪魔と人間の異らぬは、汝の実証を見て知るべし。もし悪魔にして、汝ら沙門しゃもんの思うが如く、極悪兇猛の鬼物ならんか、われら天が下を二つに分つて、汝がDSと共に治めんのみ。それ光あれば、必ず暗あり。DSの昼と悪魔の夜と交々こもこもこの世を統すべん事、あるべからずとは云い難し。されどわれら悪魔の族やからはその性悪さがなれど、善を忘れず。右の眼まなこは「いんへるの」の無間むげんの暗を見るときも云えど、左の眼は今もなお、「はらいそ」の光うろわを麗しと、常に天上を眺むるなり。さればこそ悪において全しばしばからず。屢しばしばDSが天人てんにんのために苦しめらる。汝知らずや、さきの日汝が懺悔ごひさんを聞きたる夫人も、「るしへる」自らその耳に、邪淫じゃいんの言を囁ささきしを。ただ、わが心弱くして、飽くまで夫人を誘さそう事能わず。ただ、黄昏こうこんと共に身辺を去来して、そが珊瑚さんごの念珠ごんたつと、象牙に似たる手頸てくびとを、えもな

らず美しき幻の如く眺めしのみ。もしわれにして、汝ら沙門の恐るる如き、兇険無道の悪魔ならんか、夫人は必ず汝の前に懺悔の涙をそそがんより、速に不義の快樂に耽つて、墮獄の業因を成就せん」と。われ、「るしへる」の弁舌、爽なるに驚きて、はかばかしく答もなさず、茫然としてただ、その黒檀の如く、つややかなる面を目成り居しに、彼たちまちわが肩を抱いて、悲しげに嘔きけるは、「わが常に「いんへるの」に墮さんと思ふ魂は、同じくまた、わが常に「いんへるの」に墮すまじと思ふ魂なり。汝、われら悪魔がこの悲しき運命を知るや否や。わがかの夫人を邪淫の穢に捕えんとして、しかもついに捕え得ざりしを見よ。われ夫人の氣高く清らかなるを愛すれば、愈夫人を汚さまく思い、反つてまた、夫人を汚さまく思えば、愈氣高く清らかなるを愛でんとす。これ、汝らが屢七つの恐しき罪を犯さんとするが如く、われらまた、常に七つの恐しき徳を行わんとすればなり。ああ、われら悪魔を誘うて、絶えず善に赴かしめんとするものは、そもそもまた汝らがDSか。あるいはDS以上の霊か」と。悪魔「るしへる」は、かくわが耳に嘔きつて、薄暮の空をふり仰ぐよと見えしが、その姿たちまち霧の如くうすくなりて、淡薄たる秋花の木の間に、消ゆるともなく消え去り了んぬ。われ、即ち惶として伴天連の許に走り、「るしへる」が言を以てこれに語りたれど、無智の伴天連、反つてわれを信ぜず。

宗門の内証に背くものとして、呵責を加うる事数日なり。されどわれ、わが眼にて見、わが耳にて聞きたるこの悪魔「るしへる」を如何にかして疑う可き。悪魔また性善なり。断じて一切諸悪の根本にあらず。

ああ、汝、提字子、すでに悪魔の何たるを知らず、況やまた、天地作者の方寸をや。蔓頭まんとうの葛藤かつとう、截断せつだんし去る。咄とつ。

(大正七年八月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年10月28日第1刷発行

1996年（平成8）7月15日第11刷発行

親本：筑摩全集類聚版芥川龍之介全集

1971（昭和46）年3月～11月

入力：j:utyama

校正：かとうかおり

1998年12月7日公開

2010年11月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

るしへる

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>